

溫泉と神社

第二卷 第一號 三〇〇—三〇〇

中村直勝

一

天孫降臨の時、天孫系に對立して豊葦原の瑞穂國を經營して居つた一民族に出雲系があつたその出雲系（出雲系か天孫系とかに就いての歴史的古學的の考察はこの小篇には何等の必要がない事を豫めお斷りする）の中心人物は何と言つても大國主神であつた。彼は大國主神といふ名の外に大穴牟遲神とか葦原色許男神とか八千矛神とか宇都志國玉神とか言ふ五つの名（以上古事記）と更に大物主神、大國魂神等の十指に垂んとする數多の名を所有して居つたので大名持の神と言はれ、普通大己貴神の字で現されて居る。その大己貴神が御兄弟の八十神を追ひて國土を經營して居られたときの或る日、出雲の御保の御に出で給うた事があつた。此の時、

波の穂の間を縫うて天之羅摩船に乗りて異形の風をした倭少な神が來た。大己貴神は不思議な事に思うて其神に向つて名を問はれたけれども答へない。そこで更に從者の神々に問はれたけれども、其の神々も知らなかつた、所が谷蟻が「此の神の名は久延毘古が必ず知つて居たらう」と言つたので久延毘古に問はれたら、久延毘古は「此神の名は少毘古那（少彦名）と言ひ、神産巢日神の御子である」と答へた。即ち神産巢日神に問ひ給へば、果して久延毘古の言の如くで「我が實子である、數多の子の中で、手の股より漏れた子である、宜しく大己貴と兄弟となつて其國を作り堅めよ」と言はれたので、大己貴神は小彦名神と兄弟となり國土を經營し、専ら藥禁厭醫の法を定め給うたのである。

然るに其後幾もなく少彦名神は常世國に渡り

給ひ、大己貴神之を惜み憂ひ給う事極めて深く「吾獨りしていかでか此國を經營し得べき、孰れの神と與に此國を作らん」と愁嘆せられたが、このとき海を光して來る神があつて「我を祭らば其に國土を經營せん」と言はれた。「然らば御身の名は」と大己貴は問はれた。「吾は即ち御身の幸魂奇魂である、我をば大和の三室山に鎮め祀り給へ」と言はれたので、其言に従はれた。これ大和御室山に鎮座さるゝ大和神社である。

* * * * *

古事記や日本書紀の記録する所をその通りに信ずる事の愚なる事は申すまでもないけれどもしかも今私が茲にその記紀の記載を詳細に抄録した所以は、大己貴神と少彦名命とが如何なる神と考へられたか、如何なる能力を有した神として祀かれたか、及び大己貴神と大和神社との關係を豫め知つて貰ひたいために外ならない。即ち爽禁厭醫の神として考へられ崇められたのである。

二

繼體天皇の末年より安閑、宣化兩帝を経て欽明天皇の初年の間には、少くとも我國に佛敎が渡來したらしい。がその始めは國民には佛敎の何物たるかを了解するものがなかつたので「蕃神」と呼んで始めて其の性質を知る事が出來た。斯くまでも我國民には不可解であつた佛敎が、幼稚なる我國民の腦力では到底理解する事が出來なかつた程の進んだ宗敎が、比較的早く國民一般の間に行き亘つて信せられたのは、佛者の努力が専ら交通土木の方面から救濟、慈善の方面に向けられた賜物であつて、施藥療病の方面に對する佛徒の盡力は實に目醒ましいものがあると言はねばならない。聖德太子の施藥、療病以下の四院の建立は言はずもあれ、やがては光明皇后の皇后宮職内に施藥院を置かれ、奈良朝末には官立施藥院をさへ設けらるゝ事となつたのである。この施藥療病の方面に於ける活動の源泉は即ち當時の藥師信仰であると言はねばならない。其の最も著しきものは言ふまでもな

く法隆寺及び藥師寺の設立であらう。其の前者は用明天皇即位の歲御惱あり、天皇は皇太子聖德法王と共に誓願を立て、平癒に至らば一寺を建立して藥師如來の像を安置せん事を約し給うたが、翌年崩御して之を遂ぐる事が出来なかつた。そこで推古天皇十五年に至りて本寺を創建し、止利佛師をして造らしめた藥師三尊像を安置し、後に同天皇三十年二月聖德太子の薨じ給うやまた止利佛師をして藥師三尊の像を造立せしめて之を安置したるもの即ち法隆寺であり其の後者は天武天皇即位八年十一月、中宮（後の持統天皇）御不忿であつた、天皇ために丈六藥師佛像造立の誓願を發し、其の功德によりて中宮の平癒を希うた。然るに中宮の御惱は間もなく平安を得たが、天皇は勅願の靈像漸く成らんとして鋪金未だ遂げられざる内に即位十四年九月九日を以て騰仙し給うた。中宮（即ち持統天皇）乃ち御即位前緒を奉遵して斯業を漸く成し、その稱制二年正月八日無遮の大會を設け、

同十一年七月廿九日公卿百寮と共に藥師佛開眼

の事を行ひ、次で文武天皇二年十月四日には伽藍の結構殆んど了り特に本願佛の名を冠せられたので茲に現存藥師寺の前身たる藥師寺は其の基礎を完成したものである。これは單にその著しき一例にすぎないであらうけれども、佛敎が最初我國民の間に信仰せらるゝに至つた経路は決して頓生菩提のためとか極樂往生のためとかではなく、かうした現世的な、醫藥の方面からのために信せられたのである事は勿論であらうと思ふ。

* * * * *
かくて此の藥師信仰の思想は佛敎徒の事業の大部分を覆う事となつて、佛者の努力が専らその方面に向けられたのも無理からぬ事であり、多くの療病に效果のある所謂靈場が彼等佛徒の手によりて發見せられたのも亦自然と言はねばならない。有馬の湯に二階坊、御所坊、奥之坊兵衛房池の房等の名がある事は、温泉寺の宿坊の名から出たのであらうけれども、温泉と佛敎との關係を暗示する一つである。

佛敎渡來以來、佛者の絶えざる試みは如何にして神社と接近し神祇の崇拜と融合すべきやにあつた。而して其の結果は奈良朝期以來神佛の習合となつて現はれ平安朝末頃には本地垂跡説に進化し、神佛各異り冥顯事替れども其姿は相同じといふ思想は完成さるゝ事となるのである。

私が今こゝに至る迄に費した數頁の贅言は要するに我國に於ける有名な温泉は多く佛徒の手によりて發見せられ、そこには藥師如來を本像とした温泉寺があり、城崎の如きその一例)、大己貴神又は少彦名神を祀つた温泉神社がある事を指摘せんとした伏線であると同時に、多くの温泉には温泉寺があるか、醫藥療病を司る大己貴又は少彦名を祭神とした、温泉神社が祀られて居る事の理由を物語らうとしたものである。さればこゝに其の實例を一々列擧する事は到底其の煩に堪へない所であるけれども、延喜式神

温泉と神社

名帳に見はれたる神社だけを次に表記して以て吾人の所論の根底を示して置く事としよう。

延喜神名帳	現位置	祭神(依神祇志)
國郡	神社名	
攝津	有馬	湯泉神社大、 月次新嘗
	馬村	三輪神
下野	那須	湯泉神社
	下野那須湯本	大己貴命
	村川須湯泉	少彦名命
陸奥	玉造	湯泉神社
	陸前玉造那湯	大己貴命
	本村鳴子湯	大己貴命
陸奥	玉造	湯泉神社
	磐城石城那湯	大己貴命
	本村佐波古湯	少彦名命
陸奥	玉造	湯泉石神社
	陸前玉造那川	少彦名命
陸奥	玉造	湯泉石神社
	度湯泉	少彦名命
因幡	巨濃	御湯神社
	不 明	少彦名命
伊豫	温泉	湯神社玉
	伊豫温泉那道	大己貴命
	後村	少彦名命
出雲	意宇	玉湯神社
	出雲意宇那玉	大己名命
常陸	鹿島	大洗磯前藥
	常陸茨城郡大	大己貴命
	洗崎	常陸磯前藥
常陸	那賀	酒烈磯前藥
	常陸那珂郡平	大己貴命
	磯町	少彦名命

今この表にあげたるもので最後の二者は温泉ではないけれども、海水浴場(冷温とも見得る)に於ける神社と療病との思想が、温泉の場合に於

けると同様である事を示すと共に、これもまた温泉と神社との一異例とするに足ると思ふたから併せ掲げたのである。

四

前掲の神社のうちで有馬や道後の事はあまり著名であるから略するが那須温泉神社は貞觀十一年に従四位上に陞り、鳴子温泉の温泉神社は貞觀五年に従五位下を授けられ、出雲玉作湯神社は貞觀十三年に従四位下に進み、何れもみな國史現在社として既に延喜以前から崇敬された名社であり、川度カヌヘの温泉石神社の石神震動の事は既に續日本後記に記されて居るものであり、大洗薬師菩薩神社及び酒烈薬師菩薩神社の物語は文徳實錄齊衡三年十二月の條に收むる常陸國司の言上によりて夙くに大奈母知、少比古奈の兩神が濟民のために出現されたものと信せられたものである事を知るのであつて、神祇志が祭神を大己貴や少彦名に宛てた考は、決して妥當を缺いて居ないと思ふ。而してこれらの温泉神社は何れも皆その本地佛を薬師如来であるとし

て居る事もまた當然すぎる程當然の事ではあるが、面白い現象ではあるまいか。

五

温泉が佛徒の手によりて發見されたにしろ、修験の人々によりて利用されたにしろ、湧き出る泉が療病に效果ありとすれば、それを見知つた古代人は、そこに人智の量り知るべからざる偉大な力のある事を感じ、それを神とか佛とかの靈驗に歸さうとした事は不思議ではないと言ふよりも寧ろ、それが自然である。然らばその靈妙不可思議な力の所有主である神佛をこゝに祀りて其の鴻恩を稱へ、其の靈威に報酬しやうと考へる事も、またその湧き出る靈泉の效力が久遠に不易である事を希ふ心から、その泉の保護者としてそれに相應した神佛を茲に勧請する事もまた自然の歸趨であらう。温泉と神社との關係はかうして説明しやうと思ふ。

これらの温泉神社は一般にウンセン神社、ユセン神社、ユノ神社と呼ばれて所在に存在したものであらう。讀書諸子のうち、それらの神社

につこて、創立年代、祭神、本地佛等に關して御承知の方があれば御叱正や御教示に預りたい

と思ふ。もしそれが出来るならば、筆者望外の幸である。(大正十三・六・三)

温泉と佛教

石川成章

本邦各地の有名な温泉場には大抵寺があつて其大多數は、眞言宗に屬し、本尊は藥師如來が多く、傳説に因る温泉の開祖は、行基か弘法の様な高僧が多い、元來佛教は熱帶の印度に起つた宗教で、印度人は昔から河水に浴して身心を清むる習慣があつて、彼のガンガ河(恒河)の如きは神聖な處として、現今でも一日に幾度か河水に浴して身を清めるといふことは、印度佛教徒の熱心に實行して居る修行の一つである、昔釋迦も其修行の最中に尼連禪河に浴して身を清め、心機一轉して更に菩提樹下の修行にかゝられたと傳へて居る、斯く印度には昔から入浴の

習慣が旺盛であり、又熱帶地方に於ける炎熱の關係からいふても、水浴といふ事は生活上必要なことに相違ない、故に佛經には身心洗滌のことが處々に説かれてある、日本に於ても神代から「ミンギ」といふ事があつて神に奉仕するには先づ以て沐浴して身心を清むるといふ習慣があつた。此習慣が印度以來の佛教に於ける修行の方式と調和し合體して、愈々確乎不拔のものとなつたもので、今でも神や佛に奉仕するには必ず齋戒沐浴して身心を淨むる事に爲つて居る、眞言宗には灌頂といふて、法水を受者の頂に灌ぐ法式があつて、耶蘇教の洗禮に似て居る、其